

島原の子守唄に込められた悲しみ



ムンバイ日本人会桜会会長
服部 洋子

二〇〇八年（平成二十年）八月に夫のムンバイ赴任に同行し、インドに初めて足を踏み入れました。それまでインドは十一億を超える人口とIT産業を中心に新たに発展しているアジアの大国であるという程度の知識しかありませんでした。ムンバイ到着後は日本人会の活動に参加し、同年十月に日本人墓地の墓参会に参列しました。この墓参を機に初めてムンバイと日本の長い歴史を知ることになり、一層インド、そしてムンバイへの興味と

思いが深くなりました。



エレファンタ島の石窟寺院の入り口

ムンバイと日本の繋がりをみると、十九世紀にはすでに日本の企業がムンバイに支店を開設し、事業を行っていたことは明治維新後間もない発展途上国であった日本を考えると大きな驚きを感じるとともに、日本人も遅しいと感心します。当時のムンバイは、おそらく日本よりはるかに発展していて、ムンバイに住む日本人は本国では想像できない生活を送っていたことと思います。しかし、発展する日本の貿易の蔭で辛い思いで無念の一生を終えた日本人も少なくなかったのではないのでしょうか。

か。昨年の墓参会で教えていただいた話では、若くして亡くなった方がたくさんいるとのことでした。裸一貫でムンバイに到着し、力の限り働いて運悪く病になったり、けがをしたりして命を落とした人がたくさんいたことも、また忘れてはならない歴史だと思えます。ムンバイの日本人墓地には多くのからゆきさんも葬られています。日本人がムンバイに来ると同時にからゆきさんもたくさん来ました。からゆきさんに詳しい方の資料によれば、家を助けるために自らが犠牲になってきた人、外国にいけば儲かるとだまされて日本から

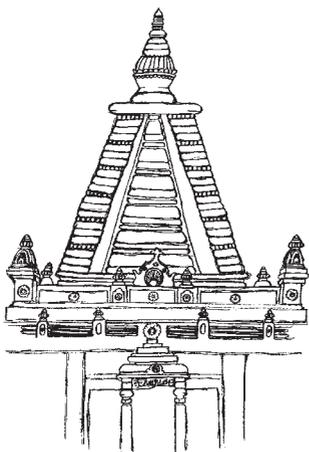


エレファンタ島の石窟寺院の内部

下がる思いです。

からゆきさんの多くは天草・島原の出身だったそうです。島原の子守唄はからゆきさんに出され、その後の様子をうたったものです。今までこの子守唄を聞いたたび何気なく一緒に口ずさんでいましたが、この歌に込められた思いをあらためて考えると、女性として、また母としての嘆きがひしひしと聞こえてきます。

ムンバイ日本人墓地を造ることができたのは、それに理解を示したインド側の寛容さから大きな役割を果たしたと思います。ヒンドゥー教が大多数を占めるインドで異教徒に墓地の造営や寺院の建立を許すインド人の精神に感謝しなくてはならないでしょう。インドと日本の関係はこれからますます強くなり、そしてたくさんの日本人がムンバイを訪れるようになるでしょう。ムンバイ日本人墓地百周年を機にムンバイと日本が歩んできた歴史をもう一度学び、日本人の逞しさとインド人の慈悲深さを後世に伝えていくことが、今ムンバイに住む私たちの役割だと強く感じています。



日本山妙法寺の全景

子どもたちの明日のために



作家

大久保 美喜子

私とインドを結びつけたのは、一枚の新聞写真でした。それは、ムンバイ市内のフォーランド通りで客待ちをしている少女たちの姿をとらえたものでした（一九九九年十二月二日・西日本新聞）。

「からゆきさん」の研究をしていた私には、その写真にうつる少女たちが、ふるさと天草から出かけて行った「からゆきさん」に見えました。

インドへ行ってこの少女たちに会わねばならない
…。

蔑みの目でみられ、「国威を損なう」とまで記され、
今なお、彼女たちのふるさとで話すことがタブーと
される「からゆきさん」。

写真にうつるこの少女たちに会えば、「からゆきさん」の心がわかるかもしれない。そう思い込んだ私は、
記者の方に、ムンバイの日本山妙法寺の森田上人を
紹介していただきました。そして、日本山妙法寺に
よって整備された日本人墓地の存在を知りました。

ビジネスビルとスラムが混在するウォルリー地区。混沌とした朝の喧騒をたしなめるように小鳥が鳴いています。

ドンドン…ドンドン…

太鼓の響きと共にお経が流れ、お線香の煙がゆらめき、辺りに神聖な空気が漂います。
供養塔。

そこに刻まれた明治時代に亡くなった「からゆきさん」と思える十代、二十代の女性の名

前。

故国を思い親兄弟のために、身を削って生きていました。貧しさの為に、外貨を稼ぐ為に、村役場が推奨した出稼ぎの形でもありました。その多くは騙されて：船に乗り：その後の過酷な生活を想像するよしもなく：時は流れ…。

現代の豊かだけれど、忙しく暮らす人々の記憶の片隅にすら彼女たち「からゆきさん」の存在はないのでしょうか。人々は、過去を思いやるゆとりもないのでしょうか…。

私に何ができるでしょう…。と、問いながらインドと関わり始めて九年の月日が経ちました。

「からゆきさん」と呼ばれた人々が、インドの大地を踏んで百年以上が過ぎ、日本人墓地が出来て昨年でちょうど百年と聞きました。

墓地は日本山妙法寺と在ムンバイ日本人の方々の手によって、静かに、丁寧に守られ続けています。手を合わせ「からゆきさん」を偲ぶことが出来ます。

本当にありがたいと思います。

私には、そこに眠る「からゆきさん」と重なるフォークランド通りの少女の姿。少女たちと幼い子ども達。その現実。

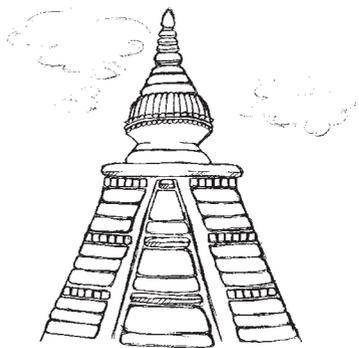
五年前、立ち上げたNPO法人「インドに幼稚園を作る会」。ネパール、バングラデイシユ、

アフガニスタンなどや、インドの寒村から、大都会ムンバイのフォークランド通りへ売られてくる少女たち。彼女たちが産んだ子どもたちの幼稚園運営という活動をしています。

その会の代表として、また「からゆきさん」のふる

さと天草の女性として、フォークランド通りに売られてきた少女たちや幼い子どもたちを見守り続けていくうと思えます。

子どもたちの明日のために…。



日本山妙法寺 (上部)

大久保 美喜子さんのプロフィール

昭和二十八年、熊本県出身。天草の女性史「からゆきさん」を研究し、アフリカ、アメリカ、中国、インドネシア、マレーシア、シンガポール、モリシヤス、インドなど世界の日本人墓地を訪ね、インドのムンバイのフォークランド通りに生まれる子どもたちに出会う。現在、NPO法人「インドに幼稚園を作る会」理事長、民宿・花月の女将、二児の母。

主な著書に、童話『みどりのニンバス』、絵本『こころみがき あいうえお まほうのことばだよ』『あかい花 いちりん あなたにあげる』、エッセイ『こころのままに』、切り絵『鬢のほつれ』（パリ「ル・サロン展」入選）、紀行『導かれて南の国へ（私の中からのゆきさん）』など。

For 100th Anniversary of Japanese Graveyard in Mumbai

The legacy of Mahatma Gandhi and the Venerable Nichidatsu Fujii (known as Fujii Guruji in India) is of crucial importance to us in contemporary times. It gives us the ever relevant message of peace and non-violence. It teaches us that violence leads to more violence, falsehood and helplessness, while non-violence leads to more non-violence, truth, and strength. This is different from the present day power-game, which employs various techniques of violence, falsehood and manipulation for narrow and selfish ends.

Mahatma Gandhi and Fujii Guruji were not dreamy-eyed spiritual leaders, but were noble souls deeply concerned with the sufferings of the human race. They believed that spiritualization of politics with change the exploitative system and will humanize the soulless surroundings. In the midst of violence, they preached and practiced non-violence as the only way for a better future. In the midst of distrust and hatred, they practiced and propagated of universal love as the path to bind people.

When Fujii Guruji met Mahatma Gandhi on October 4, 1933 for the first time at Wardha, the meeting lasted for fifteen minutes while the latter was spinning. Fujii Guruji pondered over the relation of Gandhiji's spinning and India's independence and his

own aspiration to bring tranquility to nations and peace to the world by chanting Na Mu Myo Ho Ren Ge Kyo while beating the drum. And he was quick to see the commonality. Mahatma Gandhi also appreciated the ideas of Fujii Guruji and maintained that religious revival can only be done not by eloquence or learning, but by enhancing the purity of one's life and a prayerful reliance upon the Living Truth that animates and sustains the universe.

Mahatma Gandhi brought a bloodless revolution by bringing non-violence to the public sphere of politics. Fujii Guruji worked tirelessly for world peace and international understanding based on non-violence. The biggest concern for both of them was procuring human beings and liberating the society from violence, fear and oppression. Their words and deeds hold promise for a peaceful and world.

I offer my respects to these noble and inspiring souls and feel honoured to write the Foreword to this volume to commemorate the centenary of the Japanese Cemetery in Mumbai. I thank Bhikshu T. Morita-ji and Nipponzan Myohoji for granting me this Privilege.

Usha Thakkar

寄稿者: Mani Bhavan Gandhi Sangrahalaya (ガンジー記念博物館)
／ Dr Usha Thakkar, Honorable Secretary (名誉博物館長)

◆年表

- 五三八年 日本に仏教伝来
- 七五二年 インド人僧侶が渡来、東大寺の落成式の導師を務める
- 一五八二年 天正遣欧使節団によるゴア立ち寄り
- 一八六八年 明治維新
- 一八七七年 日本へのインド綿糸輸入が増加
- 一八八二年 大阪紡績の設立
- 一八八九年 日本の印綿業視察団がインドを訪問
- 一八九一年 ラタンジ・ダーダーバイ・タタが日本を訪問し、神戸に事務所を設置
- 一八九三年 ジヤムシエトジー・ナツセルワンジ・タタが日本を訪問
- 神戸ーボンベイ航路の日本郵船による開設
- ボンベイに三井物産が出張所を開設
- 一八九四年 在ボンベイ日本国領事館の開設
- ボンベイに横浜正金銀行が支店を開設
- 一八九六年 日本郵船と三つの外国海運会社が貨物運賃協定を結ぶ
- 一九〇二年 岡倉天心がインドを訪問し、ラビンドラナート・タゴールと親睦を深める
- 一九〇三年 日印協会を東京に設置

岡倉天心が「東洋の理想」を出版

- 一九〇四～一九〇五年 日露戦争
- 一九〇七年 在カルカッタ日本国領事館の開設
- 一九〇八年 日本人墓地をボンベイに設置
- 一九一四～一九一八年 第一次世界大戦
- 一九一五年 ラシユ・ビハリ・ボースが訪日
- 一九一六年 タゴールが日本を訪問
- 一九一八年 日本からインドへの綿織物の輸出が増加
- 一九二六年 対インド貿易額が日本総貿易額の12%に到達
- 東洋ポーター・ミル社の設立
- 旧制ボンベイ日本人学校の開校
- 一九三四年 日印が通商議定書に署名
- 一九三五年 日本の綿織物がインドにおける輸入第1位となる
- 一九四一～一九四五年 第二次世界大戦
- 一九四三年 スパーシユ・チャンドラ・ボースが来日、I N Aの指導者に就任
- 一九四五年 終戦
- 一九四七年 インドが独立を達成

- 一九四八年 日印貿易の再開
- 一九五〇年 ボンベイに日本政府が連絡事務所を開設
- 一九五一年 ゴア鉱山資源開発に対する融資を実施
- 一九五二年 日印国交樹立（日印平和条約の締結）
- ボンベイの連絡事務所を在ボンベイ日本国総領事館に変更
- 一九五四年 ボンベイ印日協会の設立
- 日本の産業がインド進出を開始
- 一九五七年 岸首相がインドを訪問
- ネルー首相が日本を訪問
- 日本による対印円借款の開始
- 一九五八年 キリブル鉱山開発に合意
- 一九六〇年 明仁親王殿下（現・天皇陛下）がインドを訪問
- バイラデイラ鉱山開発に合意
- 一九六一年 池田首相がインドを訪問
- 一九六五年 ボンベイ市と横浜市が姉妹都市協定を結ぶ
- インド柔道連盟の設立
- 一九六六年 ボンベイ日本人学校の開設

- 一九六七年 日印経済合同委員会の設置
- 一九六八年 日印経済協力調査委員会合同会議の設置
- 一九六九年 インデイラ・ガンデイー首相が日本を訪問
- 一九七二年 生け花インターナショナル・ボンベイ支部の設置
- インド盆栽ソサイエティの設立
- インドによる核実験
- 一九七四年 マハーラーシシュトラ空手協会の設立
- 一九七七年 ボンベイ印日協会に盆栽研究グループを設置
- 一九七九年 インデイラ・ガンデイー首相が日本を訪問
- 一九八二年 マルチ社と鈴木自動車工業（現在のスズキ）が合弁会社を設立
- 一九八二～一九八八年 日本の産業がインドの自動車、二輪車、電子機器分野に参入
- 一九八四年 中曽根首相がデリー、ボンベイを訪問
- 一九八五年 ラジブ・ガンデイー首相が日本を訪問
- 一九八七年 徳仁親王殿下がボンベイを訪問
- ラジブ・ガンデイー首相が日本を訪問（一九八八年にも日本訪問）
- 一九九〇年 海部首相がインドを訪問
- 一九九一年 インドが経済自由化政策を発表

- 一九九二年 ラオ首相が日本を訪問
- 文仁親王同妃両殿下がボンベイを訪問
- 一九九八年 インドが核実験を実施
- 二〇〇〇年 森首相がインドを訪問
- 二〇〇一年 バジパイ首相が日本を訪問
- 二〇〇三年 インドが円借款の最大の受取国となる
- 二〇〇五年 小泉首相がインドを訪問
- 二〇〇六年 マンモハン・シン首相が日本を訪問
- 二〇〇七年 日印文化協定締結50周年を記念し、日印交流年事業を開始
安倍首相がインドを訪問
- 二〇〇八年 マンモハン・シン首相が日本を訪問
日本人墓地百周年記念墓参会の実施

(注)「ボンベイ」から「ムンバイ」への公式呼称の変更は一九九五年になされたため、一九九四年以前の呼称はボンベイとした。

あとがき

一九〇八年（明治四十一年）、ムンバイに日本人墓地が開設されてから百年の時が流れました。この間、明治からの富国政策、世界経済大不況、日清・日露・太平洋戦争の大戦、戦後の復興など、日本が目まぐるしく動いてきた中で、今では想像も出来ない程の多くの日本人がインドで、ここムンバイで一人一人の歴史を築いてきました。このムンバイの日本人墓地はそうした日本人の永久の安らぎの地として、ひっそりと今日も西海の地の片隅で息づいています。

墓地は人生の終焉しゆうえんの証でもあり、ここを訪れる度に、墓地に眠るそうした先人達の「帰りたい・帰れない」という辛く、悲しい個々の歴史と同時に、今インドに暮らす日本人に対して「日本を・故郷を思い、がんばれ」という強い心の思いを送って来てくれていると感じます。

今、世界はグローバル化が叫ばれ、国際交流・相互理解こそが世界が今後生存し、成長して行く大きな鍵といわれています。しかし、思うにここに眠る日本人たちは百年の昔か

らこれを実践されてきました。遠く故郷を離れた西海の果て、異文化の中で生き、日本人としてのアイデンティティを示されてきたことは、これからも決して忘れてはいけない日本人の心の財産であり、「島国から発ち世界で生きた日本人」の源流であると感じざるを得ません。

本冊子は「西海の地に眠る大志と孤愁」をタイトルに掲げ、日本とインドの明治時代からの歴史のつながりと、その中で生き、無念にもインドで亡くなっていった先人達の悲痛な思い、今に生きる人たちへのメッセージを一人でも多くの方に感じていただき、日本人として今後のグローバル世界の中で「国際交流・共存とは何か」を改めて考え、新たな交流・共存のあり方を創造する機会にさせていただければと取りまとめました。

本冊子編集・作成にあたり発行の趣旨をご理解いただき、ご多忙の中、快く執筆の労にあたられた方々、資料・写真、情報を提供いただいた多くの方々に心から感謝を申し上げます。

特に、インドをこよなく愛し精通され、日本人墓地百周年の本記念事業を発案いただいた萩生田前在ムンバイ日本国総領事、ムンバイ・テロ事件など激動のインドを取材で飛び回るご多忙の中、本冊子メインのパートを執筆いただいた読売新聞の永田ニューデリー支局長、一九七六年（昭和五十一年）にムンバイに着任され三十年以上も日本人墓地をお守

りいただき、墓地の歴史の証人でもある日本山妙法寺の森田上人、たまたまお寺で読ませていただいた紀行「導かれて南の国へ（私の中のからゆきさん）」をきっかけに、いきなりのメールでの寄稿依頼に快く応じていただき、インドの貧しい子供たちへ心を寄せられている天草の作家大久保美喜子様、試験勉強でお忙しい中、やや硬い内容の冊子にほんのりした温かいイメージを醸し出すイラストを描いて下さった当地のインターナショナル校第十学年（日本の高校一年生に相当）に通う福家冴味様、ありがとうございます。

最後になりましたが、冊子作成などは小中学生時代の卒業文集程度の経験しかなく、何から手をつけてよいのか分からなかった全くの素人の私たちを、遠隔地の東京からリードして下さい、何度もその「プロ」の手際で感心させた（株）東京読売サービス編集本部の井谷昌喜様には心より感謝申し上げます。

二〇〇九年十月

ムンバイ日本人会国際部

東洋エンジニアリング・インディア社長 大曾根 恒

インド住友商事会社ムンバイ支店長 尾崎 英夫

さいかい たいし こしゅう
西海の地に眠る大志と孤愁
～ムンバイ日本人墓地100周年記念誌～

平成21年10月1日 発行

編集・発行 インド・ムンバイ日本人会
企画・制作 (株)東京読売サービス
印刷 菅原印刷 (株)
